

オープンキャンパス 2003：理学部の取り組み

佐野 雅己（オープンキャンパス実行委員長）

去る7月31日（木）に全学オープンキャンパス2003が実施されました。理学部からは、6専攻と情報科学科、4つのセンターと施設、のべ51グループに協力を頂き、実演や講演、パネルやビデオなどの展示が行われ、訪れた約400名の高校生は「広がる素粒子の世界」や「ゲノム解析で探る人類の進化」など、天文、地球、物質、生命から情報にわたる多彩なテーマに目を輝かせていました。今回、理学部が行ったオープンキャンパスの特徴は初めて自由見学の形式をとったことにあります。今後の参考となることを期待し、その概要を報告致します。理学部でも昨年までは、他の学部と同様、定められたコースを引率に従って見学するという方式を取っていました。この方式は大学側の負担がある意味で最小となるやり方であったと思います。しかし、昨年アンケート結果では見学者から、展示内容には満足したものの、自分の見たい分野を見ることができなかった、という主旨の意見が大変多く寄せられました。そのことが昨年度の広報委員会の反省点となり、理学部では自由見学形式を取ることが決められ、計画がスタートしました。

しかし、後でも述べますように東大の全学オープンキャンパスでは、全体としてのスケジュールに大きな拘束があり、理学部独自に自由見学を行うためには様々な問題が予想されました。ここで簡単に全学オープンキャンパスの概要を述べますと、例年1200名の高校生を受け入れ、午前中に安田講堂で全体説明と講演会を行った後、午後から9つの学部・施設のうち自分が予め希望した2つのコースを、前半・後半それぞれ約2時間づつ見学するという方式が取られています。理学部ではこの全体1200人のうち、前半後半合わせて400人という全学部の中でも最大数の見学を受け入れました。

自由見学で最も心配された問題は、2時間という定められた枠の中、キャンパス内の端から端まで散らばった6つの学科の間を高校生がどのようにして移動し、自分の希望する場所を見学することができるのか、それを我々がどう援助できるのかという問題でした。そのため、広報委員会では以下の2つの対策を考えました。

1. 見やすい案内図を作り、展示の要点が分かる冊子を作る。

2. 建物間の移動を案内するガイド役を設ける。

1については、各学科で公開を希望する研究室を募り、展示のテーマと簡単な説明、講演・実演・パネル展示などの種別を報告してもらおう一方、広報室には各建物の配置図や、建物の立体図を簡略化して見やすく色分けしたものを作っていました。時間的に余裕のない中、広報室の手作りで作業が進められ、公開研究室が多かったこともあり、最終的に22ページもある立派なパンフレットが仕上がりました。自画自賛になりますが、このパンフレットには他学部の担当者も感心された方が多かったと聞いています。しかしその一方で、実際に短い時間内に地図だけで目標にたどり着ける人は少ないと考え、パンフレットはあくまでも建物内の移動とテーマの検索に使ってもらうことにして、建物間の移動は2で述べたように誘導係のアルバイトの学生にお願いすることにしました。

移動は、各建物から他の建物に向かって定時に誘導員が引率することで何とか対処することにしました。自分の見たい学科の貼り紙の前で待っていると、定期便のように定時に誘導係が引率してくれ



るという方式です。しかし、このやり方でも建物の遠近により人数にばらつきが出ることは十分予想されましたので、実際には一回目の移動には各学科30～40名程度の人数制限をつけさせてもらいました。また、人数の少ない学科は呼び込みや宣伝をするなど、各責任者のその場の機転による行動がうまく働いたことも付け加えておく必要があると思います。

さて、実際に午後の公開が開始すると、思いのほかスムーズに事が運び、少なくとも最初は各号館に人が分散され順調に進行しました。しかし、前半の2時間はほぼ問題なく終了したものの、後半になると定期便の時間割からずれて集まる高校生が目立ち始め、誘導が予定通りに進まなくなる場面も見られました。そのため、待機していた予備のアルバイトの方達にフルに活動してもらい、建物間の誘導を行いました。この頃になると慣れてきたアルバイト、理学部庶務の方々、各学科の担当者などで手の空いている人から、自ら率先して誘導を買って出てくれるようになりました。最後には見学者が例えば1人であっても「どこそこの学科に行きたい」という希望をかなえてあげようと皆さんが自分から進んで誘導してくれたことには大変感激しました。その姿勢が高校生の側にも伝わり、アンケートではガイド役の学生や教官がとても親切で感激したという評価が

いくつか見受けられました。計画からのずれが生じた場合には、スタッフの協力体制がいかに重要であるかを考えさせられた場面でもありました。

一方、時間が経つにつれ1号館に人が集中する傾向が見られるなど、いくつかの課題も残りました。また、各建物内でも、見学者の数に多少の差があったようです。パネルだけで説明のあまりない展示に対してアンケートの評価はそれほど高くなかった反面、理論と実験を上手に組み合わせ、理論の説明をしたあとに隣で実験をして見せた企画などはアンケートの評価も高いものが多く見られました。

全体の評価としてはやはり自由見学にして改善された面が多かったと結論できると思われます。簡単な聞き取り調査では、昨年度は一部屋当たり、のべ20人程度の見学者だったのに対し、今年度は60名程度の見学があったという報告を聞きました。建物の遠近の差をどう解消するかなど課題は残りますが、アンケート結果にも昨年のように、見たい分野が見られなかったという不満は殆ど見受けられず、最高位の評価が多かった点を見ますと結果としては成功であったと言えるのではないのでしょうか。

日頃研究で忙しいスタッフや学生がオープンキャンパスの準備などに費やす負担は決して少なくないため、毎年このような催しを盛

大にやることには抵抗を感じる方も多いと思われます。しかし、3分の1くらいの研究室が交代で公開を行えばその負担は3分の1ですみます。また、やっかいな建物間の誘導という問題も、全学が自由見学方式を採用すれば理学部として誘導をする必要はなくなり、見学者は本当の意味でキャンパス内を自由に見て回れるようになります。またその方がより多くの見学者を受け入れることが可能になります。オープンキャンパスはほんの一例にすぎませんが、社会に対して開かれた大学を求める声は今後益々強まっていくと考えられ、それに比例して増える負担をどうすべきか大学にとって悩ましい選択が突きつけられている気がします。アイデアを出し合うことで解決可能な問題も多いように思われます。

最後になりますが、理学部の研究分野は宇宙から物質、生命、素粒子まで果てしなく広がっています。その中で、世界でも最高・最大レベルにある本理学部で行われている研究の一端に見学の高校生達が触れ、目を輝かせ、将来への思いや科学への期待をふくらます手助けになれば、オープンキャンパスの1日の苦労は報われるのではないかと思います。展示や運営に協力頂いた皆様に感謝してこの報告を終わります。